

## 大正15年本郷座初春興行のこと ・ 本郷座の演劇のこと(後編)

1961年 経済卒 大村堯彦

ここで本郷座のことを調べたので少し紹介したい。以下文京ふるさと歴史館編集「本郷座の時代」と松竹百年史による。

本郷座は明治6年創業者の名をとって奥田座として本郷春木町に開業した。明治8年座元も代わり春木座と改称、明治35年に本郷座に改称する。場所は本郷春木町、今の本郷3丁目14番である。御茶ノ水の順天堂病院と大学の間を抜け本郷の方へ登って行き、本郷通りを越して本郷消防署に突き当たる道の間あたり右側になる。今ではオフィスビルとマンションの立ち並ぶ東京の何処でも有る町並は繁栄した劇場跡を偲ぶ由もない。

本郷座は春木座の時代2回の類焼にあい、大正12年の関東大震災でも焼失した。初代の建物は木造平屋建てであったが、2代目から西洋風煉瓦造の堂々たる建物であった。明治43年経営権が松竹に移ると翌年に大改修がおこなわれている。大正15年正月の吉右衛門一座の公演は大正12年9月の関東大震災で焼失後13年3月に復興したバラックでの公演であった。新装開場となったのは昭和2年1月である。

本郷座の歴史は次の4つに別けられると思う。 春木座の時代 本郷座前期 松竹経営の時代 常設映画館の時代である。

春木座の時代(明治8年から34年まで)は小芝居から大劇場に成長してゆく時代で、中堅の俳優の出演が主であったが、客寄せ格付けのため破格の給料を払って一流俳優を出演させてもいた。九代目団十郎が4回、五代目菊五郎が1回出演している。歌舞伎年表によれば、春木座の興行日数、観客数は明治26年、27年、28年の東京の大劇場 歌舞伎座、中村座、新富座、明治座に較べ格段に多い。これは春木座が小劇場並に公演回数が多かったからであるが、二回の火災と再建、派手な興行のため経営的には苦しかったようである。

本郷座前期(明治35年から43年まで)は新派の時代と言うべき時代であった。「オッペケペー節」が大当たりした川上音次郎、貞奴一座が36年に「ハムレット」など翻案劇を本郷座で上演し、それが先駆けになって新演劇の隆盛がはじまる。高田実、喜多村緑郎、河合武雄、等の一座が明治36年から40年まで本郷座を本拠地にして日本橋中洲の真砂座の伊井蓉峰に対抗して、専属作家や文学者の新しい作品を次々に上演し、大評判となった。これが新派全盛の「本郷座時代」と云われている。川上・貞奴一座は大正4年までに翻案劇「オセロ」、佐藤紅祿の「廃馬」など計12回出演している。また高田一座の芝居の中で特筆すべきは徳富蘆花の、「不如帰」、の大成功であった。

松竹経営の時代(明治43年から昭和5年4月まで)に入ると演劇活動の多様化時代を反映し、また松竹の経営方針もあって、本郷座は歌舞伎、新派、のみならず、新国劇、曾我廼家五郎・十郎の喜劇、オペラ、新劇の小劇団等の上演がおこなわれるようになった。

松竹経営第一回興行は明治43年9月の高田実、喜多村緑郎、井上正夫、井伊蓉峰の新派大合同一座の公演であった。以後明治45年4月の「川上音次郎追善劇」までの1年7ヶ月の間に14回新派の芝居が行なわれている。

松竹による歌舞伎公演は大正元年10月、松竹専属になった市川左団次(二代目)の出演からである。左団次は小山内薫と共に「自由劇場」をおこし、伝統的な歌舞伎界にありながら新劇運動の先頭に立っていた。その左団次に市川八百蔵(八代目)、市川寿美蔵、坂東秀調(三代目)、市川男女蔵(四代目・三代目左団次)、市川松蔦(二代目)の一座で、この時の上演芝居はストリンドベルク作、小山内薫訳「犠牲」、他2つも新作物で、歌舞伎の演目は「慶安太平記」のみであった。左団次一座の公演は昭和2年まで21回あり、歌舞伎の演目より岡本綺堂と小山内薫の作品を中心に新作の演目が多く、その中には「鳥辺山心中」初演、「番町皿屋敷」初演、「修禅寺物語」がある。左団次出演の芝居は大正4年までの4年間は上演が12回と集中しているが、大正5年以後は左団次の他、沢村訥子(七代目)、中村歌右衛門、市村羽左衛門(十五代目)、中村吉右衛門、市川猿之助、等がそれぞれ中心になる一座が昭和5年4月常設映画館へ転向するまで出演している。その中では吉右衛門一座と共に訥子一座の多いのが目立っている。

新派の上演状況を見ると、大正時代に入って、井伊、河合、井上、喜多村に貞奴も1回参加したが大正元年から3年まで3回と低調になり、4年は5回、5年5回の公演のあと5年間中断した。この新派の低迷期に本郷座で特筆すべきことは連鎖劇の上演、新生劇団の誕生があったことである。連鎖劇とは芝居と同じ俳優が出演している無声活動写真とを連結して交互に舞台でみせる劇で浅草の中小劇場で流行していた。新派に行き詰まりを感じた井上正夫らが、大正6年1月から7年8月まで本郷座で上演し、学生や若いインテリ層で大盛況であった。本郷座の連鎖劇上演は井上の新派復帰でおわるが、続いて新生劇団が登場した。「新組織新派」と銘打ってできた新劇団は梅島昇も加わって大正8年12月までほぼ本郷座を独占して公演している。大正11年2月「修正第一回新派大合同」で井伊、河合、井上、喜多村、梅島昇らに花柳正太郎も入って新派が復活上演された。以後昭和5年まで16回公演された。水谷八重子は昭和3年10月の本郷座の公演に参加して「何が彼女をそうさせたのか」「両国の秋」「私のパパさん」を喜多村、花柳らと共演している。

本郷座では歌舞伎、新派以外に大正8年、9年オペラも上演されていて、伊庭孝率いる新星歌舞劇団、清水金太郎・田谷力三らの一座、石井漠の一座で5回公演がある。また曾我廼家五郎一座は松竹の経営になってから4回、昭和4年には新国劇も2回公演されている。

しかし本郷座で演劇史上忘れてならないのは昭和4年から映画館になるまでの約1年間のプロレタリア演劇の上演であった。大正末期から昭和初年代かけて社会主義思想の影響を受けて社会改革を主張する演劇運動が活発に行なわれた。築地小劇場が分裂して出来た「劇団築地小劇場」(青山杉作・田村秋子・東屋三郎・東山千栄子ら)と「新築地劇団」(土方与志・丸山定夫・山本安英・沢村貞子ら)。左団次一座の中堅俳優が参加した「心座」(村山知義・河原崎長十郎・市川団次郎ら)と「大衆座」(佐野碩・市川八十蔵・中村翫右衛門ら)の上演である。松竹は本公演の合間や月末月初の短期間これらの劇団に劇場を賃貸した。昭和4年4月26~27日「心座」がソビエト演劇「トラストD・E」を映画交えた公演をして大入りになった。これが本郷座のプロレタリア演劇の始めである。「心座」は同年10月には4日間予定していたソビエト演劇の戯曲が突然上演禁止になり「前線」と云う芝居に切替え上演したが、公演中私服警官が張り込み、氣勢を挙げた観客数名が本富士署に連行されるという事件があった。「劇団築地小劇場」は昭和4年8月5日間、9月5日間、11月12日間、昭和5年1月10日間の計4回の公演があり「阿片戦争」「吼える支那」「西部戦線異常なし」「建設の都市へ」など反戦、反帝国主義の翻訳劇の上演で大成功をおさめた。「大衆座」は昭和5年1月3日間、本郷座での旗揚げ公演として翻訳ものの「スパイ」と「筑波秘録」を上演した。大衆座は封建的、保守的な歌舞伎の世界を批判し、松竹の独占的商業資本に反対してプロレタリア演劇を目指した劇団で、「心座」解散後の俳優達も参加し、のちの前進座結成につながる。新築地劇団は昭和5年2月10日間「蜂起」とゴウリキイの翻訳物「母」を公演したが、「蜂起」が検閲により大幅カットされ新聞が公演中止と誤って報じたため、観客がほとんど入らず不入りで劇団結成以来の打撃をうけた。これが本郷座のプロレタリア演劇の最後となった。プロレタリア演劇にたいする警察当局の脚本の検閲は極めて過酷、横暴であったと云われている。対象は抱擁シーンなど風俗に関するもの、政治思想に関するもの、ストライキや小作争議に関するもの、反帝国主義戦争に関するもので、大幅な場面のカットや原本削除がおこなわれ、それも初日直前の場合もあった。しかしこれらの芝居は労働者の観衆の強い共感があり概ね大盛況であった。

本郷座は昭和5年4月松竹系常設映画館になるが、ここでは劇場としての本郷座の紹介で終わりたい。本郷座は昭和20年3月の東京大空襲で焼失して以後再建されない。本郷座が突然専門の映画館に変更されたのはプロレタリア演劇上演による騒擾が原因の1つだったかも知れない。

本郷座は山の手と下町の接点に位置し、サラリーマン、職人、労働者と共に文教地区であるため学生の観客が多く、そこに集まる観客は新しい時代の空気を反映する演劇を求める志向が強かった。また経営者も春木座時代から劇場経営の苦勞の歴史があり、大劇場でありながら小劇場的な性格を持っていて、時代の要請に呼応して大胆に実験的な演劇も取上げた。本郷座の歴史を振り返る時、本郷座は日本の演劇史上、特異な役割を果たした劇場であったことを忘れることは出来ない。

参考にした「本郷座の時代」の表紙の写真を見ると、アーチ式の西洋建築の劇場前が群集で埋まっている。烏打帽、中折れ帽、学生帽の男達に混じって学帽の子供や丸髷の女の姿もある。明

治 41 年 11 月 20 日川上音二郎一座「ボンドマン」初日の光景である。本郷座の賑わいのほどがわかる。最後に同誌の「あいさつ」冒頭文の一部を紹介させていただく。

「本郷座は、明治後期には、1500人以上を収容する大規模な洋風建築による劇場で、東京の六大劇場のひとつにも数えられ、たいへん繁栄しました。しかし、本郷座の歩んだ道のりは決して平坦なものではありませんでした。関東大震災を始め3度も焼失するという困難にあいながら、多くの人々や文化にささえられ、そのたびに不死鳥のように甦りました。また日本の近代演劇の発展にも深く関り、その時代のエポックとなる活動が舞台上で展開されました。新派劇の全盛期が「本郷座時代」と象徴的に呼ばれるように、文化創造の上でも非常に重要な役割をはたしてきたことができます。」

おわり。